研究報告

テーマ：美浜町の障碍を持っている人たちの将来の働き口について

石川ゼミ（チャレンジド）

＜研究理由＞

障碍者授産施設が美浜町にひとつしかなく、今回チャレンジドさんで活動していく中で、子どもたちが将来どのようになっていくかが気になったためである。

＜調査内容＞

美浜町役場には電話で、福祉課の男性の方に質問しました。質問内容は、「美浜町の障害者の働き口はどのくらいあるのか？」と「これから障害者の働くところを増やす予定はあるか？」の二つである。

チャレンジドさんの職員さんには直接、それぞれに、今後働くところが増えるということはあるのか、また、つくる計画はあるのかをお聞きした。具体的に質問内容は、「アゼーリアの定員はいっぱいなのか？」と「チャレンジドは今後働く所をつくる予定はあるのか？」である。

また、美浜町の障害者計画の内容と図を使って現状を具体的に示していきたい。

＜結果＞

・美浜町役場の福祉課の男性職員

Q. 美浜町の障害者の働き口はどのくらいあるのか？

A. 美浜町には重度障害者の授産施設は１つしかない。症状の重い障碍者は授産施設（セルプ・アゼーリア）に、軽度の障碍者は他の一般の会社で働いているというのが現状である。

Q. これから障害者の働くところを増やす予定はあるか？

A. 町役場は県が動かなければ単独でつくることはできず、障害者の働く事の出来る施設を求めるような活動も行われていないため、増える可能性は低い。

全体を通して、役場の職員さんはあまり積極的な口調ではなかった。

・チャレンジドの職員

Q. チャレンジドは今後働く所をつくる予定はあるのか？

A. チャレンジドとしては、就職支援は、学校の方でやっていてくれているので、今のところ特別支援していることはない。しかし、親さんからの悩みを聞くことや、子どものストレス発散できる場としての立場をとっているそうです。親の気持ちや意志を一番に考え、長い目で話し合いを進めていく中で、親さんが考える理想の子供の働くところをつくっていければ良いとの事でした。

チャレンジドで聞いたその他機関での取り組み

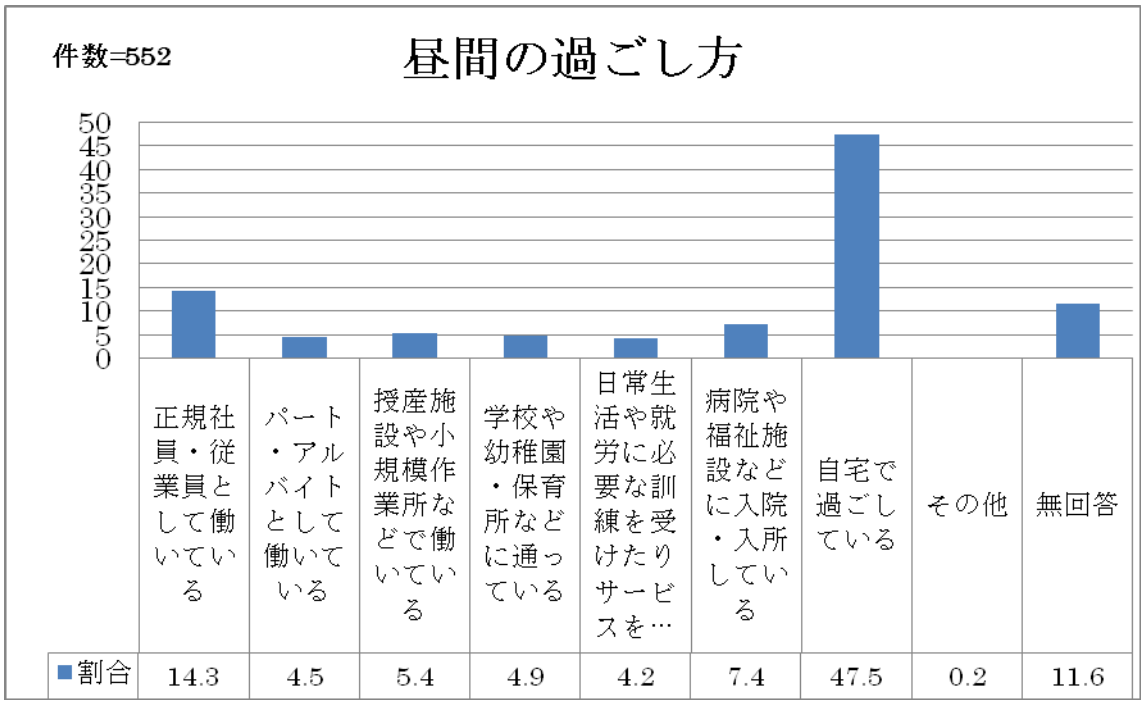
セルプ・アゼーリアの定員は 35 人であったが、45 人に増えた。しかし、この施設は、知的障害者のための施設であるため、身体障害者の方の仕事がなく、家にいる人も多いとの

事です。
　他にも、親さんの中には、セルプ・アゼーリアしか働き口がなく、自分の子どもが得意なことを活かせる仕事がさせてやれないなどとの不安の声があるという。

美浜町障害者計画より
具体的な実施目標は、次の図のとおりである。

サービス名	単位	21 年度	22 年度	23 年度
居宅介護 重度訪問介護 行動援護 重度障害者等包括支援	人	35	40	45
	時間	1160	1260	1370
生活介護	人	9	10	44
	人日	249	271	1029
自立訓練（機能訓練）	人	－	1	1
	人日	－	22	22
自立訓練（生活訓練）	人	－	－	－
	人日	－	－	－
療養介護	人	－	－	－
	人日	－	－	－
就労継続支援（A 型）	人	－	－	－
	人日	－	－	－
就労継続支援（B 型）	人	－	－	2
	人日	－	－	44
児童デイサービス	人	－	－	－
	人日	－	－	－
短期入所	人	28	33	38
	人日	56	66	76

　この図からも、わかる様に、美浜町は、就労に関するサービスを増やすことは使用としていない。
　また、美浜町の障害のある方へのアンケート調査も載せたいと思う。このアンケートは美浜町の障害がある人が昼間どのようにすごしているのかを調査したものである。下図の通り圧倒的に、「自宅で過ごしている」という人が多いことが分かる。二つの図から、自宅で過ごすしかなくて、親などの扶養家族がいなければ生活することが困難であることが推測される。



＜結論＞

今後、すぐに働き口が増えるということは、まずないと考える。なぜなら、美浜町は、障害者の就労についてはきわめて消極的であるからである。

しかし、美浜町の障害者の方は、高齢化が進んでいて、今すぐにでも、障害のある人が自分である程度自立して社会の中での居場所を町がもっと積極的につくっていかなければいけないと考えた。

今のこの状況を少しでも改善していくためには、日本福祉大学の学生が NPO 法人の協力を得ながら、地域を変えていく必要がある。具体的には、表向きは、今回サービスラーニングの活動でお世話になったチャレンジドさんが行い、それを学生がサポートをするという形で行うと良いと思う。

授産施設には、障害者関連の社会福祉法に基づいて作られている"法定授産施設"と、それ以外の"小規模授産施設"の 2 種類がある。施設を造るためには、まず地域の方々に今の美浜町の福祉の現状をしっかりと知ってもらう必要がある。そのために、私たち学生が NPO と協力し、自主的にセミナーなどを開き、伝えていくことが大切である。こうして、地域の方々の美浜町の福祉に対する問題意識を高めていく。また、美浜町はなかなか動いてくれないという現状があるので、学生が住民から署名などを集め、美浜町に動いてもらえるよう働きかける必要がある。そして、美浜町にお金を出してもらい、障がい者の授産施設を造っていく。また、複合住宅を利用し、学生も手伝いながら、そこで障がい者が集まり、一緒に何か仕事をするというのも一つの手段だと考える。

このように、学生が中心となり、施設を造っていくことは可能である。学生が積極的に働きかけ、住民の声を聞き、地域を変えていくことがとても大切である。これから、地域住民の福祉に対する意識が高まり、障がい者がより安心して生活していける社会にんっていって欲しいと考える。